元朝の漢文明に對する態度

蒙古族が支那に君臨した元一代の間、支那の文明に對して如何なる態度を執つたかといふことは、史上甚だ興味のある問題と認められる。從がつて直接間接これに關する論述は少くない。然しながら未だ必ずしもこれについて精細な研究が施された譯ではなく、その考えに於てもまた一致してゐない點もあると認められる。自分も從來これに關して多少の研究を試みたが、問題の性質上、廣くこれを諸種の方面から考へ、且つ北人の支那に入つて建てた諸朝の執つた態度とも比較して見なければならぬ必要もあつて、いまだに其の成果を得ない次第である。今こゝには其の中の一節、主として元朝の發した詔勅もしくは官府の文移の體裁について前人の所說を續ぎ、それに因んで聊か概括的の論述に及んで見ようと思ふ。

趙翼は其の二十二史劄記卷三十に於て、「元諸帝多不習漢文」を論じ、元の世祖・武宗等の漢文を知らず、最も能く儒道に親しんだと謂はれる仁宗の如きすら、大學衍義を讀むに當り、これを蒙古語に譯せしめたもので、漢文に於て甚だ深貫ならざりしを知るべく、獨り學問に心を留めたのは、位に卽くに及ばずして死んだ世祖の太子眞金のみであつたとし、また天子のみならず、朝廷の大臣等に於ても同樣で、世祖の時、江淮行省に一人の文墨に通ず